

「祟り」に結び付けるのは民衆の生活感覚の常道である。人々にとって、最も恐ろしい信仰と結び付けている。人々の歴史感覚の根底には、理解出来ない現象がある。これを説明するのが、

祟りという民間信仰である。白骨が井戸から発見されたというモチーフは、このような祟りの民俗心理と重なっている。

⑥ この話が語られた時代は、不景気、戦争、敗戦後の荒廃した日本、高度経済成長のバブル期といった時代である。吉野川流域では、木材産業の影響によって経済生活に様々な影響を受けている。まさに「自然環境が開発に伴う変化」によつて激変した時期である。人々はこのよだな時代に、「祟り」という古い信仰や「人殺し」という奇妙な話題を伝えている。過去と現在が、「殺人」事件と「祟り」という古い信仰で奇妙に結びついているのである。

### 【補注】

この民話の基本資料は、花園大学古典と民俗の会、比較民話研究会の合同調査団により、平成六年三月、平成六年八月、平成七年三月、平成七年八月の四次にわたる調査の中で採集されたもので、この時のテープ、カードを基本資料とした。また、この話を整理した田中健太郎君の資料も一部参照した。

(まるやま・あきのり／花園大学)

シンポジウム・地球環境と民話

## 民話のなかの里山・川・海と

### 人びとの暮らし

米屋 陽一

#### 一 はじめに

日本列島の春夏秋冬のなかで育まれてきた民話（昔話・伝説・世間話）や童唄などには現在取り沙汰されている「環境」の問題が横たわっている。環境そのものがテーマになつてしたり、背景に潜んでいたり、さりげなく語られていたり歌われていたりもある。それらを確かめながら、口承文芸の成立事情・伝承の底流にひそむ人びとの意識などにふれてみたい。それは現代民話の発生にも連なる。川田順造は鳥の鳴き声などの「聞き做し」を「音の共感覚」（『声』）、吉沢和夫は「身の周りの動物たちの中に意味を見出そうとする想像力のあり方」を「共意識」（『椿の湖』）と呼んでいる。この用語（造語）からも民話と深くかかわる人びとの生き方・暮らし方の説明ができるよう。数少ないが取り上げた例話を通して、これまでの自然と人びとの共生のあり様と口承文芸の役割の一端が明らかになるであろう。それは同時に、これから「環境」の問題を解く鍵にもなるは

だ。

(シンポジウム「発言要旨」)

## 二 昔話に語られた里山・川・海と動物・植物

昔話は虚構のモノガタリである。時間や場所を特定せずに「むかし」「あるところに」で始まる。そして、無名の民衆や動物・植物を主人公として登場させ語り継がれてきた。伝説はある特定の人物・地域などに結び付き、事実に近い形で伝えられてきた。世間話は比較的近い過去・時間帯で話され、顔見知りの人々が登場したりする。つまり、昔話には伝説・世間話とは異なる伝承実態が認められる。

伝承の虚構の世界はどうにしてできあがつたのだろうか。虚構の世界の伝承とはいがなるものなのだろうか。昔話の語りの場における語り手と聞き手との関係からとらえてみよう。

(1) 「むかしああつたじおんな。あるどこね、じじとばばとあつたじおん。じじあ山さ薪とりに行つたずし、ばあ川さ洗濯ね行つたじおん。」(『桃太郎』青森県)

(2) 「むかしむかしあつたとさ。じいさん山へ柴刈りに行つたとさ。」(『藤原の民話』(民話の研究会・蒼海出版))

さ。ばあさん川へせんたくに行つたとさ。ばあさんせんたくしていると、上方から香箱が流れてきたとさ。おばあさん、「実のある香箱はこっちへこい、実のねえ香箱はそっちいけ」ちつたとさ。」(『花咲爺』群馬県)

(3) 「ざつとむかしあつたと。ある所に、じいさまとばんばがあつたと。じいさまが山さ行つてすずめつ子つかめてきて、たかでむぞうがつていらつたと。」(『舌切雀』福島県)

(4) 「早く芽を出せ柿の種」「早くでつかくなれ柿の種」「早く実がなれ柿の種」「早く赤くなれ柿の種、赤くならねえとはさみではさみきるぞ」ちゅうて。そうしたら、だんだん赤くなつたとさ。」(『猿蟹合戦』群馬県)

(5) 「山へ萱刈り行つて、そして、萱いっぱい刈つて、ふたりして萱背負つて山から出てくる時に、「あかがり痛し、あかがり痛し」とつて、うさぎがゆつたら、たぬきが、「なんだあ」つて。」(『かちかち山』福島県)

(6) 「ある漁師村に、浦島さんちゅう人がおらしたちゅう。年中魚釣りに行つておらしたちゅうた。魚ば釣ろうと思つて行きよつたら、浜のところで、四、五人の子どもがおつてないじやろこらしておつたちゅ。なんじやかと思つて、行きよらしたら、ふとかふとかかめをばつかめてこらしよつてた。」(『浦島太郎』佐賀県)

(1)(3)～(6)『日本昔ばなし一〇〇話』(日本民話の会・国土社)

よく知られている昔話の一部分を例としてあげてみた。この語り手と聞き手との関係は顔見知りで心の許し合える間柄が一般的であった。村々における語りの場の基本形といえる。わが家の爺婆から、隣近所の爺婆から子どもたちへという図式は、

語りの場——昔話世界を同時体験する・共有するということである。それは年齢差・時代差を越えて、人が里山・川・海・動物・植物あるいは神々と時空をともにしているともいえる。同じ風景が見え、同じ鳥の声が聞こえ、同じ風を感じられるということでもある。つまり、前掲の「音の共感覚」「共意識」に連なつていく。

伝統的な伝承の語り手たちは、「語っているときに、子どもとの頃に聴いた昔話のなかの風景が現実の風景と重なつて甦つてくる」という。そういう実感が伝承には不可欠であつた。昔話の語りの場・昔話伝承の背後には、生まれ育つた土地・労働生産活動の場・自然環境がしっかりと根を張つており、そのことを語り手や聴き手は暗黙のうちに了解していたのだろう。もしくは、成長の過程で納得してきたのだろう。祖先たちの自然環境の観察や生活体験は生きる知恵となつて伝承の過程に組み込まれてきたのだった。それは、謡・童唄など他の口承文芸についても共通していえることなのではなかろうか。

### 三 飢饉伝承（謡・童唄・昔話）

「むかいの山から綿帽子かぶつてお嫁のくるものナンゾ」（ゼンマイ）  
「むこうから姉さがお歯黒つけてくる、ナアニ」（カタクリ）  
謡を二題あげてみた。子どもたちは謡かけや遊びを通して野

の草花の性質や特徴をきちんと覚え、食料になるものを区別できるようにし、食するまでの過程を大人たちから学んだ。これはムラで生活してゆくための知恵でもあつた。  
岩手県遠野市松崎町の阿部ヤエ女から童唄や昔話を聞いて納得したことがあつた。

「カタゴ きつちきち 姉っこア なにする きつちこ  
ぱつたーんと 機おる」と歌い「飢饉のときは食べるものがない、こうしたときにカタゴが一番に食べれるんだもの、おひたしにして」「ガシドキつまり、凶作とか飢饉がきたら、そのカタゴをとつて食べつということでうたつてる」と、飢饉伝承と重ねて語る。

「つぶどん つぶどん どんつぶどん どろ田の中の どん  
つぶどん」

「つぶせん つぶせん わるつぶせん おしおゆでにつめて  
あがりやんせ どうも どうも しょっぱいね」

と歌つた。また、昔話「田螺長者」の中の「つぶせん つぶせん まめ つぶせん からすとゆう ばかとりに ざつく

りもつくり さされた」という歌を歌い、「たしか、四年に一回、ガシドキがくるつていうな具合でしたので、それでタニシ

はすごくありがたいものだつたそうです。そのため、歌でも昔話でも聞かせとけば、ガシドキがきて、ああそうだつたと思ひだして、孫でもなんでもそれを食べて生きのびてくれるんじゃないかなつていう年寄たちの願いがあつて教えたんだそう

です。」と、やはり飢饉伝承と重ねて語る。「拙稿「遠野の謎と

童唄と昔話—飢饉の伝承と重ねて—」『民話の手帖』第36号（日

#### 四 まとめ

「てっぺんかけたか」「本尊かけたか」「包丁立てた」「弟腹、突つた」で知られる昔話「時鳥と兄弟」の「聞き做し」の装置は、「時鳥が鳴けば自然薯掘り」という自然暦と深く結び付いている。

また、「山鳩不孝」などの小鳥前生譚も飢饉伝承を物語っている。自然界の循環は自然暦という知恵となつて、狩猟採集・農耕生活を支えてきた。それは食物を確保するための手段でもあつた。

佐々木徳夫の『遠野の昔話—笹焼燕四郎』（ぎょううせい）の「笹焼燕四郎」から、昔話の威力・魔力とあわせて、人間の知恵の偉大さを教えられたことがあつた。凶作が続いて村人は困りはてている。なまけ者でばか四郎と呼ばれていた男が、山の笹を焼いて自然に燕が生えることを教える。村人は餓死をせずに助かつたという話である。戦後の食料難の時に語り手の工藤新平氏はこの昔話を思い出した。そして、ばか四郎がやつた通りにやつてみた。すると「台地の笹藪を焼き払つて掘り起こすだけで、その焼畑から燕を蒔かなくとも燕が自然に芽生えてきた」という。この感動的な出来事を自身も工藤氏から聞くことができた。祖父が語り伝えなければならないことを工藤氏は確かに受け継ぎ、現在、子や孫に語り伝えようとしている。飢饉伝承は救荒食物の伝授の方法でもあつた。その重要な担い手は口承文芸であった。

人はジネン（天体・山川草木・動物など）・モノ・コト・ワザ・ココロなどが失われたときそれらをコトバで再生する。あるいは失われつつあるときコトバで補完する。景観（自然景観・文化景観）に対しても同じことがいえる。嵐・大水・大地震・津波など猛威の経験は物語を発生させ、災害伝承として語り伝えてきた。人は自然の中で生かれ、動物・植物と共に生きていた。そういう時代のコトバ・伝承は人の生きる知恵でもあつた。山林・里山・緑地・田畠・河川・湿地・海浜、そこに生息する動物・植物・野鳥・虫と人とのかかわりの中で口承文芸の多くは成立している。伝承世界で語られてきたり歌われてきたりした自然・環境は虚構でも誇張でもない。伝承の母体は、あくまでも人々のあるがままの姿であり、実感そのものであつたに違いない。わたしたちは、新たななる共生の時代を模索するために伝承世界から学ぶことの意味や価値を明らかにしなくてはならないだろう。それは、口承文芸学が今日的立場から自然・環境へ接近する姿勢を示すということであり、その点検・検討・発信（具体案・提言）をわかりやすい形で示すということでもある。

（よねや・よういち／國學院大學）